

子ども健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)  
論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between maternal antibiotic exposure during pregnancy and childhood obesity in the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

妊娠中の母親の抗生物質使用と小児肥満との関連:エコチル調査

ユニットセンター(UC)等名:千葉ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名:Pediatric Obesity

年:2022

DOI:10.1111/ijpo.12956

筆頭著者名:櫻井 健一

所属 UC 名:千葉ユニットセンター

目的:

本研究では、妊娠中の抗生物質の使用と子どもの3歳時点での肥満との関連を明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加する子どもを対象に、3歳時点での身長と体重から体格指数(BMI)を算出した。BMIの95パーセンタイル以上(年齢別の成長曲線の上から5パーセント以内)を肥満と定義した。母親の妊娠中の抗生物質使用については質問票及び医療機関における記録を用いて調べた。母親の妊娠中の抗生物質使用の有無と生まれた子どもの3歳時の肥満との関連をロジスティック回帰分析により評価した。

結果:

すべての子どもを対象とした解析では、妊娠中に抗生物質を使用したグループで、子どもの3歳における肥満がやや多い傾向が示された。性別とばく露時期を分けた解析では、女兒において妊娠後期の抗生物質使用が3歳の肥満と関連することが示された。

考察(研究の限界を含める):

妊娠中の抗生物質使用による生まれた子どもの3歳時の肥満への影響は、子どもの性別や抗生物質へのばく露時期によって異なる可能性があることが示唆された。しかし、その影響は大きいとは言えず、妊娠中においても治療上必要な抗生物質については使用を控える必要はないものと考えられる。本研究の限界点として、抗生物質使用については参加者の質問票の回答に基づいた部分があり、状況を正確に捉え切れていないと言えないことが挙げられる。そのため、妊娠中の抗生物質使用が子どもの肥満に与える影響を正確に評価するためには、抗生物質の使用状況をより詳しく調査することが必要である。

結論:

本研究の結果から、妊娠中の抗生物質使用が子どもの肥満に影響を与える可能性があることが示唆された。